

<今朝の聖書から>

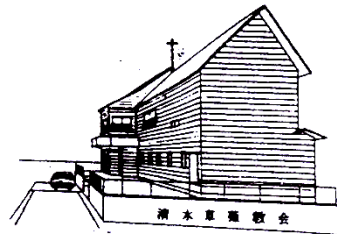
【からっぽの墓】 23:56 につづく24章に聞きましょう、“家に帰って、香料と香油を準備した。婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ”とありますから、安息日の次の日、墓に出かけて行ったのは、女性たちだということがわかります。このからっぽの墓そのものは、復活を直接に意味しません。遺体のなくなったことを知った人たちは途方にくれましたし、24:11 に“使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった”とあるように、弟子たちも、信用することができなかったのです。復活を確認した者であれば、墓がからっぽであることは当然なのですが、墓がからっぽであることは、復活を指し示してはいません。ルカ9:22 に“人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている”とあることを、聞いてはいましたが、目前に起こった出来事のゆえに、心に残っていなかったようです。“弟子となしたまえ”と讃美をする教会員、このようなことはないでしょうか。かなりの聖書の箇所は、教えとして、その事実よりも、その出来事として書かれていることの、信仰上の教えとして受け取ろう、このように読まれ、また何を指し示しているのかと説教としてしまうことがあるようです。

【罪人たち】 同じく7節に“罪人に渡され”とあります。この罪人はいったい何のことでしょうか。ここで示される罪人というのは、律法の外にある人々のこと、すなわち異邦人を示す言葉とってよいでしょう。当時の極刑は、勿論死でしたが、十字架はユダヤのやり方ではありませんでした。そのころのユダヤの死刑の方法は、がけのはじっこに、後ろ向きに立たせ背中から突き落とすなどのものでした。ユダヤ対異邦人という理解よりも、いま私たちは罪という言葉で、キリストという尺度で考えますし、“幾度となく主に背き、まことに悔い、心から嘆き”と告白をします。それは、十字架の尺度で考えさせて頂く、ということの意味しています。

【思い出す救い】 十字架の尺度で考えさせて頂くと言いましたが、“そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した(24:8)”という事は、とても現実には難しいのです。今日の信仰者も、特に苦しなくなった時など、“洗礼は受けるには受けたが”と誤ってしまい、今は神どころではない、現実の“境遇に対処しなければならない時”、と口にしてしまいます。与えられた十字架を捨て、他の罪深い、何の利益にもつながらない、嫉妬心や嘆きを背負ってしまい、試練を味わうことがあります。“あなたの十字架を背負って”、“私のくびきを”と仰る、恵みの教会生活をこれからも続けましょう。

週報

2011年 4月 24日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリースタジスト

清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル公会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡県清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp

振替口座 00890-6-214042